

ホトトギス
昭和二十九年五月二十一日発行
今期二冊五月一日発行
昭和二十九年五月二十一日発行
今期二冊五月一日発行

ホトトギス

五月号



風雅の小筥〔二十八〕

廣太郎

最近ホトトギス社に電話が掛かってきた。

「もう、今年から天皇誕生日は二月の季題として詠んでもいいですか」という御質問で、確かに令和二年から二月二十三日は今上天皇の誕生日となり祝日であり、季題としても今後二月二十三日が「天皇誕生日」として詠まれる事には全く異存は無い。考えてみると、三十二年前にも昭和から平成になり『ホトトギス新歳時記』も平成八年二月一日に改訂された時に昭和では四月二十九日であったのを十二月二十三日に移したが、解説には「例句はその時代の存の句であるが、便宜上挙げる。」として昭和の

みちのくの花の天皇誕生日 対馬千代子

と、何とも春らしい例句も挙げられている。その後平成二十二年六月一日に第三版として、三十の新季題を追加して発行され、この時の例句としてジングルベル響き天皇誕生日 稲畑廣太郎

と借越ながら拙句も例句として採用されたが、季節的には平成を意識して詠んだように記憶している。

実は前述御電話頂いた方が令和の天皇誕生日を詠みたかったという理由が、虚子が二月二十二日生れ、という事を強く意識されたというのだ。確かに一日違いでホトトギス俳人としては何か不思議な縁を感じる事もあるだろう。考えてみると、天皇誕生日の季題は現在では元号が変わる度に月日が変わり、季節が変わる事も多い。それにより却って詠む楽しみも増えるとも言えるだろう。今後色々可能性も探って行きたいと思う。

旬日記 汀子

令和元年五月四日 菅屋ホトトギス会

みよし野の思ひ出重ね柏餅
遠くより白し卯浪の波頭

新茶濃く淹れてもてなす心あり
五月五日 下萌旬会

新緑に目を休めたる家居かな
配られて五月の節句なりしこと

五月六日 ロイヤル吟行会
薔薇園の盛りと聞けば行かずとも

短夜の覚めて吟行日和かな
五月九日 清交社

体調の戻りたること薬の日
予定とはあつて無き如夏に入る

庭師への依頼は根切虫のこと
快晴の日を給はりし柿若葉

体調の過信ならざる薬の日
見たくないものを見てゐる根切虫

五月十日 工業倶楽部
祝日は又旅の待ちぬし更衣

五月十一日 四国ホトトギス同人会
旅五月明るき上衣着てみたる

確かの夏訪ふ健康を有難く
土佐の夏訪ふ健康を有難く

運転を頼みたるより土佐は夏
更衣して来しやうなせぬやうな

五月十二日 四国ホトトギス俳句大会
母の日の母を忘れて土佐の旅

初夏の土佐友の思ひ出尽きざるも
五月十四日 大阪倶楽部

初夏の旅終へていつもの日々となる
遠くより確かに余花と見し旅路

旅衣著迷ふといふ涼しさよ
北の旅余花の盛りに間に合ひし
根切虫今日は庭師の来る日かな
元氣でふ消息を聞く涼しさよ

五月十四日 綿業倶楽部
遠くより祭ぞめきのありそめし

日常のなかに入つてくる祭
快晴の一日崩れぬ旅の夏

蟻の列にはその先に何かある
五月十五日 夏潮旬会

卯浪越えはじまる土佐の旅路かな
母の花無きわが庭を淋し目り

母の日の花を飾りて四日目に
風そよぐ林の花又見え隠れ

五月十六日 クラブ合同
立夏てふ解放感のありにけり

豆飯に一人の夕餉菜しまむ
癒ゆる日も近し若葉の明るさに

これよりの旅路若葉に包まるる
五月十八日 北海道ホトトギス同人会

延齡草手に萎えてゆく萎えてゆく
どこまでも人を見かけぬ大地初夏

この広き大地に桜咲き終る
足許に初夏の来て大地初夏

一人一人見かけぬ大地初夏の蝦夷
五月十八日 北海道ホトトギス俳句大会前日旬会

蝦夷に着き大地は初夏の中にあり
北海道降り立つ初夏の旅一歩

五月十九日 北海道ホトトギス俳句大会
涼しさをもてなすホテル十勝川

たんぼぼの広き大地に名残あり
初夏の旅語れば尽きぬ蝦夷の友

五月二十一日 有恒俳句会
旅慣れていつもの熟寝明易し

五月二十一日 無名会
東京の雨発ちて来し薄暑かな

若葉には若葉の主張ありにけり

どこまでも広野の果てのなき若葉
楡若葉果てなき如く蝦夷の旅
くつろげる薄暑の家居旅帰り
五月二十三日 きざらぎ旬会

富士包みきれざることも夏霞
書き置きしメモの字読めず明易し

雨止めば暑さの待つてゐる外出
旅帰り涼しさ恋ふる大地あり

五月二十四日 時雨旬会
新茶淹れそれがもてなしなりしこと

二階より見えて泰山木の花
風五月今から旅へ行く人も

新茶汲み交はして聞きぬ消息も
明るさは五月の空でありにけり

五月二十六日 旬会と講演の会
世の中の過ぎゆく早さ初夏とても

袋掛けてふ手順には迷ひもなく
仕上りてゆける修羅場も袋掛

スケジュール混みたることも初夏らしく
五月二十七日 稽古会第一旬会

半世紀前の若さに戻る初夏
皆年を取りしことを忘れ汗の会

年取りしことは現実会の夏
稽古会暑さのともせぬ仲間

五月二十八日 稽古会第二旬会
雨予報暑さ納まる期待あり

暑くとも降られたくなき旅路かな
長く生き来しは語らず汗を拭く

世の中を憂ひつつ夏稽古会
来年を約し始まる汗の会

五月三十一日 アネモネ旬会
新緑の北の旅路の日日のとどまらず

待つてぬし薄暑の日日のとどまらず
旅心ふくらみゆける緑かな

心地よき薄暑の旅となりぬべし
何となく杯を揚げたき薄暑かな

皆揃ふまでの会話の弾む夏

廣太郎句帳

廣太郎

令和元五月一日 「かきぞとぎス」六頁野分會例句会

緑立つ俳誌の未来信じつつ
春惜む視線や富士はあの辺り
元号を三報外れて祝ぎの空
元禄と令和を繋ぐ焔の名残
春惜む三百年の旧家かな

五月二日 蕉心会

草若葉園に濡れ色足してゆく
元号を重ね名園緑立つ
春惜む十連休の中日かな
蒼天と鬨ぎ合ひたる春の雷
その中の紫に春惜しみけり
降り癖の都心寝癖の髪ゆら
春雷の一閃令和目覚めゆく
蝌蚪の国にも改元のありさうな

五月三日 はじめての芦屋川句会

つつし燃ゆ令和の御代を寿ぎて
里帰りせし教会の暖かし
故郷の一会に春を惜みけり

五月四日 芦屋ホトギス会

柿若葉生れ来る子の名も決まり
ミュージシャン夢見る吾子や柏餅
卯浪汲み友の訃報を聞いてをり
新茶汲み友の訃報を聞いてをり

五月五日 野分會例句会

とびを飛ばす水平線を歪めつつ
セルを着て森へ消えゆく女かな
セルを着て母となりゆく娘かな
飛魚の太平洋の狭過ぎる
飛魚の宇宙洋の狭過ぎる

五月五日 青嵐會音屋例会

矢車の色失ひてより暮るる
眠らざるもの矢車と恋心
琴平の佳人踊子草苞へ
矢車の廻りて剛至君江戸へ

五月七日 カトリック新聞選者吟

御復活寿ぐための残花かな
五月九日 土筆会

牡丹の今崩れんとする気品
古茶啜りワイン談義の二人かな
街騒を消しして原生林薄暑
公園に薄暑啄む雀二羽
めまどひに惚れられたる円らな眼
古茶苦し免許返納せし母に

五月十二日 四国ホトギス同人会、大会

影が先づ動き目高と判るまで
夏来る令和最初の大会に
めまどひに好かれ人には好かれざる
新緑を眼下に統べて天守閣
涼風の水目覚めれば色目覚め
睡蓮の朝日カルチャ若草句会
五月十三日 朝日カルチャ若草句会

城といふ高さ薄暑を見下して
百年の家の語部鯉
夏に入る昨日は昨日今日は今日
紅変へし君の笑顔や夏に入る

五月十四日 北國文芸選者吟

軽暖を吐き出し駅のラッシュかな
老鶯のオベラ歌手めく音色かな
五月十六日 前議員句会

令和の世薄暑の日射纏ひつつ
新茶汲む新元号をしみじみと
淡々と首都夏めいて来りけり

五月十六日 登高会

令和でふ期待と不安夏来る
セルを着て風を膚にしてしまふ
セルを着て君は天女となりゆけり
花水木改元の空彩れり
夏来る都心離るる日も近く
アメリカカに嫁ぎし妹や花水木
水平に過る風音花水木

五月十七日 廣邦会

公園の清掃薄暑纏ひつつ
その中に鳥語響かせ若葉風
五月十八日 北海道ホトギス同人会、大会
夏霧に翻弄されて着陸す

その先に社神木めきて余勝
咲くものに薫風惜しみなく十勝
犬ふぐり踏まねば行けぬ社かな
日差得て十勝野の余花いよ濃く
若葉風大陸めきし十勝野に
夏霧を放ちて蛇行する大河

五月二十日 目黒学園句会

音が出た海酸漿と判るまで
君らしき海酸漿の音色かな
稜線を浮き上がらせて山うつぎ
山女釣るせせらぎといふ静けさ
山女釣る水の機嫌を取りながら
水底を知り尽したる山女かな
深山にも別の華やぎ花うつぎ

五月二十五日 青嵐會音屋折の春院の為不在投句

主治医てふ涼しき声でありにけり
軽暖の歩も軽や声かに退院す
治癒といふ一言に汗引いてゆく
病院をの自歩葉桜通り風薫る
久々の自歩葉桜通り風薫る

五月二十五日 野分會東京例会

飛魚や天気晴朗波高し
セルを着てちよつと近所の模型屋へ
とびを飛ばす大海戦の記憶もて
日本海剥がしてとびを宇宙へと
五月二十六日 ホトギス社句会

外つ国の元首迎へて首都の初夏
稲城野の風裏返し袋掛
初夏や虚子の母恋ひ説く講師
星条旗子の電飾タワー初夏

五月二十八日 若水句会

君だけが似合ふ百万本の薔薇
麦打つて讃岐に老いてゆく薔薇
豆飯を炊けば恙の君の笑み
麦打の音讃岐富士目覚めさせ
薔薇百花足して令和の夜明かな
豆飯や里の消息香り来る
一輪の薔薇は現場を知つてゐる

五月三十日 静の会

鯉のぼり令和の風を捌きつつ
鯉のぼり小さな恋を俯瞰して

雑詠句評（四月号より）

ややかすれ声なる虚子の手毬唄 東京 今井千鶴子

おでん酒虚子のことなら負けはせぬ 相模原 木村享史

虚子先生の手毬唄をご存じなのだ。懐かしく思い出されたのだろう。「手毬唄かなしきことをうつくしく」「母姉と謡ひ伝へて手毬唄」という虚子先生の句を思い出さぬ者はあるまい。手毬唄ではないが、年尾先生の文章を引用させていただきたい。

「私の妹の晴子や章子は、幼い頃に父に抱かれてゐたりする場合が多く、私の目に残つてゐる。

京の五条の橋の上、大の男の弁慶が、この唄を調子づけて、うたひながら晴子達を寝かせつけたりしたこともあつた。その唄の調子は全くぶつきらぼうであつて、いつも同じ調子であつた。私の耳には父のこの『きようオの五じょうオのはしうへエ』といふ唄声は残つてゐる。晴子や章子がその声を覚えてゐるかどうか。」（霜衣）

虚子を知る、今となつては少なくなつてしまった中の御一人である。しかも御親戚として、実際幼少の頃には実際虚子が唄う手毬唄をお聞きになられたのである。虚子の声は俳句朗読レコード等で現在でも聴く事が出来るが、生の声を覚えておられるというのは今となつては貴重である。（廣太郎）

おでん酒でも酌み交しながら句仲間たちと虚子の談義でもしていたのであろうか。作者は虚子のことを直接知っておられる数少ない中の一人である。そしていつも虚子に思いを馳せて俳句の道歩んでおられ、作者の俳句にはしばしば虚子への思いが感じられるのである。

作者の話には、直接虚子知らない学者としての虚子の研究者の話よりもずっと凄みがある。御句はさすがに作者ならではの俳句であり、「虚子のことなら誰にも負けなぞ」という気概が感じられる。（紀元）

奇しくも虚子を御存知の方が続く事となつたが、こちらは俳句を實際虚子に学ばれた方で、そんな御講演も何度か拝聴した事がある。その時の事は鮮明に覚えておられ、やはり虚子の偉大さが垣間見られるが、おでん酒を嗜みながらの虚子を語る仕草が想像出来、俳論を戦わす楽しい一時が感じられる。（廣太郎）

天地有情

江子選

数へ日も数へずなりぬ何もせず
 数へ日の中の一と日の日曜日
 百一歳翁真中に初笑
 初絵馬の八坂のねずみ福福し
 オフィス街ひつくり返し大夕立
 大夕立都心の電波塔歪め
 物当てて隠してありし隙間風
 逸早く枯木となりし庭の椽
 逝く人を惜みて年を惜みけり
 かく集ひかく語り冬あたたかし
 句に遊ぶ心ほのぼの冬ぬくし
 いとほしむ命は人も綿虫も
 ときめきてクリスマス待ちぬたる頃
 数へ日と言ひつ一つ日遊びけり
 隙間風座り替へたるところにも
 建て替へもかなはぬままに隙間風
 酔ひつつも河豚雑炊の鍋奉行
 鱒酒や語調だんだん強くなる

神戸 後藤比奈夫
 同 同
 同 和田華凜
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同
 同 浜崎素粒子
 同 同

冬至待つ心どこかにありにけり
 よく晴れて歳末らしき空となる
 逃げやすき冬日を恋うてめぐり来し
 送る人送らるるひと息白し
 海坂を出で雲抜ける初日の出
 初明り館の窓辺に旅の人
 支部長の見舞下さる冬日和
 王宮のこんな所に鴨のぬし
 変りなく一人足りずの去年今年
 元日や卒寿還暦集ひけり
 大雪とならねば良しと寝に立てる
 炬燵寝を戒められし妻も亡く
 寒紅をちよとさしてより華やげる
 うつたへるごとき瞳や大マスク
 伊吹山澁瀬として雪白し
 千里山に雲一つなき初句会
 春月の細しうすべにいろの雲
 上弦の桜月夜でありにけり

龍ヶ崎 今橋真理子
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同
 淡路島 木下圭子
 同 同
 福山 竹下陶子
 同 同
 東京 河野昭彦
 同 同
 仙台 赤川誓城
 同 同
 東京 高濱朋子
 同 同
 吹田 大橋 暁
 同 同
 東京 今井肖子
 同 同